

令和8年(第20回)みどりの学術賞選考委員会
委員長コメント

令和8年(第20回)みどりの学術賞受賞者の選考にあたり、選考委員会は、みどりに関する学術研究に造詣の深い全国の学識経験者452名の方々に対し、受賞に相応しい候補者の推薦を依頼いたしました。

その結果、候補者として、大変幅広い研究分野から63名の研究者を推薦していただきました。

選考委員会は、推薦のあった方々の業績を慎重に調査・審議し、保全遺伝学及び森林生態学、発生細胞生物学の分野で活躍されているお二人の方が、受賞に相応しいとの結論にいたりました。

受賞者のお一方は、京都大学大学院農学研究科教授の井鷲裕司博士です。生物多様性保全に関わる希少種の管理・保全のため、マイクロサテライトマーカーを始めとした遺伝マーカーを用いた遺伝解析や比較ゲノム解析により、希少植物の交配様式や空間的遺伝構造、遺伝子流動、保全価値評価などの研究を国内外で展開されています。さらに、一連の成果を論文や書籍として発信するとともに、一般市民向けの講演を多数行い普及活動にも尽力されるなど、希少種の保全遺伝学研究の発展に大きく貢献されました。

もうお一方は、東京大学大学院理学系研究科教授の東山哲也博士です。被子植物の重複受精において重要な花粉管ガイダンス(誘導)の分子メカニズムを明らかにされました。さらに、顕微観察の成果が高校生物の教科書や科学番組等で幅広く活用されるほか、国内の関連分野の研究の興隆にもつながり、百数十年にわたり沈滞していた花粉管ガイダンスの研究の活性化と植物科学の発展に大きく貢献されました。

受賞者のお二人は、いずれも学術的な観点から極めて優れた業績を修められただけでなく、人類とみどりとの関わりについて深く追求され、みどりを活かして暮らしていく未来を示されました。

選考委員会を代表し、両博士の永年にわたるご研鑽に対し、心から敬意を表するとともに、みどりに関する学術が新たな知をもたらし、社会を動かす源泉になることを期待いたします。

令和8年3月16日

みどりの学術賞選考委員会委員長
加藤美砂子